イタリアに暮らすバングラデシュ人移民の生活および就労状況

—渡航時の 2 つの紐帯に注目して—

清　野　佳奈絵

清野　佳奈絵

要旨

イタリアに暮らすバングラデシュ人は1992年には5000人をわずかに越える程度に過ぎなかったが、2015年1月1日にはイタリア政府発表で11万5301人がイタリア国内に居住しており、この20年で20倍以上に増加、現在ではイギリスに次いで、ヨーロッパで2番目にバングラデシュ人が多く住む国となっている。

本稿の目的は、路上物売りを含めたイタリアに暮らすバングラデシュ人移民全体を対象としたインタビュー調査から、彼らがイタリアに渡航する際に利用した紐帯に注目し、それらの紐帯がイタリアでの生活・就労状況に与える影響を考察することである。彼らが渡伊時に利用した親族関係に基づくネットワークと、仲介人（*adam beparis,* ベパーリ）による2つの繋がりに注目し、これら2つの繋がりはイタリア入国時だけではなく、その後の滞伊生活にも影響を与えると想定した。

移民研究において、移民が持つ血縁・地縁関係と友人関係は、移民に際してのコストとリスクを引き下げ、移民による純利益を増大させるため、国際移動の可能性を高めるとされ、この関係が海外就労や高賃金、貯蓄の可能性、送金といった様々な経済的利益につながっていくような社会関係資本を形成するとされている。しかし、この繋がりが、移民後に移民にとって必ずしも便益ばかりをもたらすものでないことを、本稿ではグラノヴェッター（Mark S. Granovetter）の『弱い紐帯の強さ（*The Strength of Weak Ties*）』を援用して証明を試みた。具体的には、一般に強い紐帯である親族関係に基づくネットワークと、親族が不在であるがゆえに頼るという意味で弱い紐帯である仲介人による繋がりに注目し、来伊時に移民が保持していたこれら2つの紐帯が滞伊生活に与える影響を分析し、強い紐帯が移民に必ずしも便益をもたらさないことを明らかにした。

バングラデシュ人移民が来伊時に保持している2つの繋がり、すなわち強い紐帯である親族ネットワークと弱い紐帯であるベパーリによる繋がりは、来伊後の最初の就業に影響を及ぼしていた。強い紐帯を利用した場合、在伊バングラデシュ人社会内部での安定した生活を得られるが、その低所得状態にとどまる可能性も高くなっていた。一方、弱い紐帯を利用した場合は多くが、そうした安定を得にくい路上での物売りなどのインフォーマルセクターに参入することになるが、何らかのきっかけで、強い紐帯を利用した人よりも大きな成功を得られる可能性があった。

もちろん、そのような成功を収める者は少数であり、今回の調査では成功を得ることなく帰国した人は見えていないため、追って調査をすることが必要である。

しかし、グラノヴェッターの『弱い紐帯の強さ』の理論的枠組みを用いることで、移民後の生活や就労に便益をもたらす親族関係に基づくネットワークが、多くの場合、大きな成功をもたらさないことを証明した。

1.　イタリアに暮らすバングラデシュ人移民

本稿の目的は、この20年間でイタリアにおいて急増しているバングラデシュ人移民[1]を対象として、彼らがイタリアに渡航する際に利用した紐帯に注目し、それらの紐帯がイタリアでの生活・就労状況に与える影響を考察することである。

イギリス植民地時代から移民が行われていたイギリスとは異なり[2]、現在のバングラデシュにあたる地域からヨーロッパ大陸への移民が増加し始めたのは1970年代中頃からである［Priori 2012:57］。イタリアにも、1970年代には僅かながらのバングラデシュ人移民がやってきた［Qattrocchi e Toffoletti et al. 2003:58］[3]。

現在ではイタリアがイギリスに次いで、ヨーロッパで2番目にバングラデシュ人が多く住む国となっている。具体的には、イタリアに暮らすバングラデシュ人は1992年には5000人をわずかに越える程度に過ぎなかったが［LPS 2014a：7］、2015年1月1日には11万5301人がイタリア国内に居住しており[4]、この20年で20倍以上に増加している。特に、イタリアで外国人が最も多く居住する首都ローマ市[5]では、ルーマニア、フィリピンに次ぎ3番目に多い外国籍人口となっており、2016年1月には3万913人が滞在している[6]。ローマの中央駅にあたるテルミニ駅付近のヴィットーリオ広場周辺にバングラデシュ人経営の店舗やレストランが多く存在するほか、ローマ市内南東部に多くのバングラデシュ人が住んでいる。2014年のイタリア政府統計ではバングラデシュ人移民の71.6％が男性で、その38％が30歳から39歳となっていることが指摘されている。また、彼らの6割を占める被雇用者の多くが、バングラデシュ人コミュニティ内で就労していることも特徴のひとつである［LPS 2014a : 26］。

イタリアに暮らすバングラデシュ人移民についての研究は、1990年

代初めのローマのバングラデシュ人移民の商業活動等について記したKnights［1996］、彼らのローマでの生活およびその集住地区について記述したPompeo［2011］やPriori［2012］の研究、また早くからバングラデシュ人移民が定住しているヴェネト州による報告書［Savini 2004］や、同州モンファルコーネに暮らすバングラデシュ人移民についての来伊背景や滞伊生活について詳しいQattrocchi e Toffoletti et al.［2003］の研究等がある。近年ではバングラデシュ人女性移民についてのBisioによる研究［2014］やバングラディシュ人男性移民の男性としての役割に注目したDella Puppa［2012］、バングラデシュ人移民の属性や労働状況に関するイタリア労働・社会政策省の調査報告［LPS 2014a, 2014b］がある。また、イタリア国外でも移民経路に注目したRahman［2012a, 2012b］や送金の影響を分析したMannan and Farhana［2014］等が発表されているが、路上の物売りを含めた彼らのイタリアでの就労・生活状況の詳細な分析は管見の限りほとんどない。

2.　研究方法

本稿では、路上物売りを含めたイタリアに暮らすバングラデシュ人移民全体に対するインタビュー調査をもとに、彼らのイタリアでの生活・就労状況を分析する。特に、移民が持つ様々な繋がりの中でも、彼らが渡伊時に利用した親族関係に基づくネットワークと仲介人（*adam beparis*, 以下ベパーリとする）による2つの繋がりに注目する。なぜなら、これら2つの繋がりはイタリア入国時だけではなく、その後の滞伊生活にも影響を与えると考えられるからである。

移民研究において、移民が持つ血縁・地縁関係と友人関係は、移民自身、初期移民、移民の出身地と移民受入国の居住者をつなぐネットワークであり、移民に際してのコストとリスクを引き下げ、移民による純利

益を増大させるため、国際移動の可能性を高めるとされている。そして、この関係が、海外就労や高賃金、貯蓄の可能性、送金といった様々な経済的利益につながっていくような社会関係資本を形成する［Massey and Arango et al. 1998 :.43］。

しかし、この繋がりが、移民後に移民にとって必ずしも便益ばかりをもたらすものでないことを、本稿では1973年にグラノヴェッター（Mark S. Granovetter）が発表した『弱い紐帯の強さ（*The Strength of Weak Ties*）』を援用して証明を試みる。具体的には、一般に強い紐帯である親族関係に基づくネットワークと、親族が不在であるがゆえに頼るという意味で弱い紐帯であるベパーリによる繋がりに注目し、来伊時に移民が保持していたこれら2つの紐帯が滞伊生活に与える影響を分析し、強い紐帯が移民に必ずしも便益をもたらさないことを明らかにする。

グラノヴェッターは、ボストン郊外に住むホワイトカラーのエリート層労働者が転職時に利用したネットワークを事例に、その人間関係を個人間の紐帯の強さに基づいて分析した。彼の言う紐帯の強さとは「共に過ごす時間量、情緒的な強度、親密さ（秘密を打ち明けあうこと）、助け合いの程度、という4次元を（おそらく線形的に）組み合わせたもの」である［グラノヴェッター 2006 : 125］。

グラノヴェッターは、個人間の紐帯を「強い紐帯（strength ties）」と「弱い紐帯（weak ties）」に分類した。強い紐帯は同質性の高い人々の間で結ばれるため、集団内部での繋がりとして機能するが、それ故にコミュニケーションの伝達については重複するものが多くなる。一方、弱い紐帯は異質性の高い人たちの間で結ばれるため、異なった集団間での繋がりとして機能する故に新出の情報を得やすい。つまり、「伝播されるものが何であれ、強い紐帯よりも弱い紐帯を通じて受け渡された方が、より多数の人々に到達し、より大きな社会的距離（つまり経路の長さ）を乗り越えることができる」のである［ibid., p.130］。

この結果、グラノヴェッターは弱い紐帯が、「個人が機会を手に入れる

うえで、またその個人がコミュニティに統合されるうえで、不可欠なもの」［ibid., p.147］と評価し、社会移動の機会をもたらす重要な資源であり、個人を社会に緊密に結びつける役割を担っていることを指摘した。

本稿ではこのグラノヴェッターの理論を用い、移民が来伊時に持っていた紐帯が、その後の移民先での生活・就労に与える影響を考察する。つまり、親族関係に基づく強い紐帯が、仲介人であるベパーリによる弱い紐帯と比較して、必ずしも恩恵をもたらすものではないことを明らかにする。

本稿ではこれら2つの紐帯の機能を分析する前に、まず彼らのイタリアでの就労状況及び生活状況から、調査対象者を既に成功を収めている段階にある移民（グループA）から、まだ安定した生活や職を得られていない移民（グループD）まで、4つの階層的なグループ（A, B, C, D）に分類する。

そのうえで、グラノヴェッターの理論を用い、この分類と渡航時に利用した弱い紐帯と強い紐帯との関係性、およびこの2つの紐帯が移民の仕事と生活に与える影響を分析し、強い紐帯の弱点に言及する。

図1　調査を行ったイタリア各都市

本稿は2014年4月の2週間と同年9月の3週間に、図1に示したイタリア各都市で行ったインタビュー調査に基づいている。これらの都市の中でも特に、イタリアで最もバングラデシュ人が多く滞在している街であるローマを主たる調査地とした。

対象者とは主に機縁法で出会ったが、これとは別に路上や屋台で物を売っているバングラデシュ人に直接、声をかけて話しを聞かせてもらうという形式も取った[7]。

3.　在伊バングラデシュ人移民の社会経済状況による類型化

イタリアに滞在するバングラデシュ人の生活状況はさまざまであるが、収入や仕事、不動産の有無などによって、ある程度まとまった特徴をもつグループに分けられることができる。本節では表1のように、調査対象者をすでに成功しているグループAからそうでないグループDへと4つのグループに分け、彼らのイタリアでの生活状況を考察する。

表1　調査対象者のライフステージによる分類

	定義	人数	割合
A	自営者で自分名義の店舗などを複数持ち、従業員を雇い、安定し余裕ある生活を送っている者	4	7.41%
B	自営者で自分名義の店舗などを持ち、安定した生活を送っている者;フォーマルセクターの正規従業員	10	18.52%
C	一般的なフォーマルセクターの正規従業員;Aの経営する店で働く従業員	15	27.78%
D	フォーマルセクターあるいはインフォーマルセクターの非正規従業員;自営の路上物売りなど定期的な賃金をもらっていない者	25	46.30%
計		54	100.00%

出所：インタビュー調査より筆者作成

イタリアですでに安定した生活を築いているバングラデシュ人移民は、グループA(7.41％)およびグループB(18.52％）である。

Aのグループは、自営者で複数の店舗などを持ち、従業員を雇っている者である。彼らは平均的なイタリア人以上の収入[8]を得ており、安定し余裕のある生活を送っている。また、多くは家などの不動産をもっており、自分名義の店を所有している。

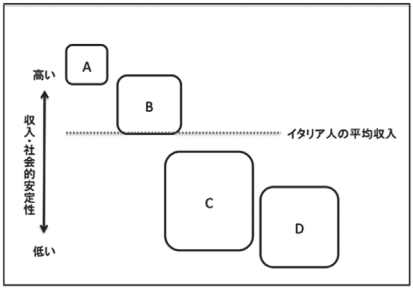
Bのグループは、Aのグループと同様に自営者である者か、フォーマルセクターの正規従業員となっている者で、彼らの収入もまた平均的なイタリア人と同等である。被雇用者の場合、雇用主はイタリア人、バングラデシュ人どちらの場合もありうる。自営業の場合、Aのグループとの違いは、複数の店を持たず、従業員もいないかごく僅かなことが多く、その商いは小規模である。

一方、イタリアでイタリア人と同程度の収入を得ていないバングラデシュ人移民をグループC（27.78％）およびD（46.30％）とする。

Cのグループは店舗やレストランで雇われているフォーマルセクターの一般的な正規従業員や、Aに分類されるバングラデシュ人移民のもとで働く者である。在伊バングラデシュ人移民の多くがこのグループに分類される[9]。雇用主はバングラデシュ人の場合が多いが、イタリア人に雇われている者もいる。しかし、彼らの多くはバングラデシュ人移民社会の中で生活しているため、その収入はイタリア人と比較して低い傾向にある。

次いで、イタリア国内の観光地でよく目にする路上で物売りをしている移民を含むインフォーマルセクターに従事している人々を、グループDとする。このグループには、イタリア人やバングラデシュ人のもとで、屋台や店舗で非常勤雇用されている人たちも含める。彼らの収入は、ほかのグループの人たちと比べてばらつきがあり、日々の暮らしでやっとという者から、Cに分類される人たちと同等の収入を得ている者もいる。

図2　4つのグループの概念図



出所：筆者作成

したがって、図2に示したように、この4つのグループの関係は階層的ではあるが重複している部分もある。また、各グループに含まれる調査対象者の数も異なるため、図2に示したように、CやDのグループに分類される者が、AやBに分類される者よりも多くなっている。

4.　調査結果から見る2種類の紐帯とその機能

インタビューを行ったバングラデシュ人移民は、女性2名を含む54名で、その多くは20代から40代である。調査対象者全員の教育レベルを

正確に把握することはできなかったが、多くはバングラデシュで高等教育を受けていた。調査対象者54名のうち、教育年数について回答した者32名で、その中でも学士号以上の学位を取得した者は15名（27.7％）いた。UNESCOの統計によれば、バングラデシュの大学修了者数[10]は7.27％であり、これと比較すると調査対象者の教育レベルがかなり高いことがわかる。また、4つのグループと教育レベルは必ずしも正の相関にある訳ではなく、むしろグループCよりグループDの移民の学歴が高くなっていた。

調査対象者の出身地は図3に示したようにダッカ管区（22名、40.0％）が最も多くなっており、その中でも特にダッカ県出身者（13名、23.64％）が多い。ローマではショリオトプール県出身者が多く、ミラノではマダリプール県出身者が多く、ボローニャではクミッラ県出身者が多い［Savini 2004］というように、イタリアに滞在するバングラデシュ人移民の出身地には偏りがあることが知られているが、今回の調査ではその実態を十分明らかにすることができなかった。このことは、本調査がそうした同郷出身者の繋がりにアクセスできなかったことを示している。

図3　調査対象者の出身地（管区別）

注：管区はバングラディシュで最上位の行政単位である。図3では7つの管区を示したが、2015年9月にダッカ管区からマイメンシン管区が分離し、現在では8つの管区がある。

このような背景を持つ移民について、来伊時にもっていた2つの紐帯に注目すると、表2および表3に示したように、それらに言及した調査対象者全体では、イタリア入国時にいずれの

繋がりも持たない者がわずかに多かった。しかし、彼らをグループ別にみると、親族関係に基づく強い紐帯はグループCで、ベパーリによる弱い紐帯はグループDで多くなっていた。したがって本節では、グループCとDの移民に注目し、この2つの紐帯の機能を明らかにしていく。

4.1.　グループCの調査対象者にみる強い紐帯の機能と特徴

強い紐帯、つまり来伊時に自分より先にイタリアに移民した親族がいたかどうかをグループ別に示したのが表2である。この表ではすでに言及したように、グループCでのみ、強い紐帯を持っていた者が多くなっていた[11]。

グループCに分類される移民の大部分は、親族等が経営する商店やレストランなどで働いており、来伊時にこの親族によって呼寄せられている場合が多い。したがって、Cでは自分より先に来伊していた親族がいたと回答した者が、他のグループより多く53.33％にのぼった。フセイン(#28)[12]は、こうした親族の呼び寄せによって安定した生活を得ている典型例である。

表2　自分より先に来伊していた親族の有無　(単位:人)

親族の有無		あり	なし	不明	計
カテゴリー	A	0	4	0	4
		0.00%	100.00%	0.00%	100.00%
	B	4	4	2	10
		40.00%	40.00%	20.00%	100.00%
	C	8	4	3	15
		53.33%	26.67%	20.00%	100.00%
	D	3	6	16	25
		12.00%	24.00%	64.00%	100.00%
全体		15	18	21	54
		27.78%	33.33%	38.89%	100.00%

出所：インタビュー調査より筆者作成

「来伊にあたっては中国人が保証人になってくれた。弟が先に来ていたので、彼がすべて手配をしてくれ、直接イタリアにやってきた。来伊した後、1年間は無職だったが、その後（親戚の大経営者が行っている）このホテルでの仕事を見つけた。イタリアでの生活は良くはないが余裕はあるので、（モスクでの活動

等）宗教的な生活を送ることができている。下の息子を連れてきたら、自分は帰ろうと思っている」(#28, ホテルおよび食料品店で就労)。

フセインをイタリアに呼び寄せたのは弟だが、来伊後はイタリアでいくつもの事業を行って成功している親戚のもとで働いている。彼は収入に完全に満足しているわけではないが、それよりも時間的な余裕ができたことを好意的に受け止めている。

また、フセインは自分の息子を呼び寄せたら自身は帰国したいと述べており、ある程度安定した生活を手にしたバングラデシュ人移民もまた、強い紐帯を用いて自分の近親者を呼び寄せるという意味での典型例でもある。

イタリアですでに安定した生活を築いているグループAの調査対象者に注目すると、このグループCの移民とは反対に、全員が自分より先に来伊した親族がいなかったと回答した。これは彼らの平均滞伊年数が長いことも影響しているが、同時にパイオニア的存在である彼らが先にイタリアに渡り、そこで安定した生活を手にいれた後で、自分の親族等を呼び寄せていることの裏返しでもある。

例えば、イタリアで野菜の栽培を中心に成功を収め、その販売事業を欧州数カ国で展開しているグループAのマハメッド（#45）は、40人以上のバングラデシュ人従業員を雇っている。

「自分が最初に来た時は誰もおらず、全部一人でやった。少しずつビジネスが軌道に乗ってから、親族を呼び寄せるようになった。自分のもとで働いている人はすべて親族で、呼び寄せも仕事もすべて自分が面倒を見ている。自分よりお金を持っている在伊バングラデシュ人は少しはいると思うが、4, 50人も雇っている人は自分だけだと思う」(#45, 食料品店及び農場経営)。

このように、被雇用者であるグループCのバングラデシュ人移民から見れば、強い紐帯である親族関係に基づくネットワークは就労先を得るために有効な繋がりである。そしてまた同時に、この強い紐帯はイタリ

アにおいて少ない収入で生活をしていくためにも、有効な繋がりである。

通常、単身でイタリアに暮らす男性バングラデシュ人移民はメス[13]と呼ばれる住居に複数人で暮らすが、バングラデシュ人に雇用される場合、この住居も提供される場合がある。グループCのコリム（#40）は、親戚が働く店で一緒に働き、雇用主が所有するメスで他のバングラデシュ人移民と同居している。

「来伊の理由は叔父がいたから。この叔父も（他のバングラデシュ人が経営する）同じ店で仕事をしている。仕事は週6日で、朝8時から夜8時まで交代制で働いていて、昼休みは2時間ある。住んでいるのは雇用主であるバングラデシュ人が経営するメスで、値段は食費込で300ユーロ（4万5千円弱）であり、叔父もそこに住んでいる。800ユーロの給料をもらっており、そのうち200ユーロは送金している」(#40, 野菜卸売店で就労)。

月収800ユーロはイタリア国内の平均収入[14]より低いが、メスで暮らし、バングラデシュ人社会の中で生活する場合、祖国への送金も可能な金額である。それゆえにコリム自身も「ここでの生活は良い」と言うほど、イタリアでの生活に満足しているのである。

このように、バングラデシュ人が経営する店舗等で働くグループCの人たちは、渡航時に利用して以来保持している親族関係に基づく強い紐帯を活かし、先行親族が斡旋する仕事や住居を得て、移民先で安定した生活を送っていた。バングラデシュ人コミュニティの中で暮らすことは、祖国での生活と同様に、その内の階層に属することで安定した生活を享受することを意味する。この強い紐帯を前もって手にしていなければこの様な安定した生活を得ることはできない。しかしその一方で、来伊時の関係性を覆すこと、あるいは階層を登ることは故国同様容易ではなく、安定した生活を享受し続ける傾向にあるため、得られる収入は限られたままである。

4.2.　グループ D の調査対象者にみる弱い紐帯の機能と特徴

弱い紐帯、つまり来伊時に仲介人であるベパーリを使用したかどうかをグループ別に示したのが表 3 である。弱い紐帯について言及した調査対象者の中で、それを保持していた人がそうでない人よりも多くなっていたのはグループ D においてのみであった。

弱い紐帯であるベパーリをつかって来伊した者の大部分は、より多くの収入を期待してバングラデシュを出国し、就労の機会を求めてイタリアにやって来ている。その理由の一つが、イタリアに渡航する際にベパーリに対して高額な支払いを済ませていることである。観光客相手に路上でおもちゃ等を売り歩いていたバリ（#22）もイタリアでの収入を期待し、ベパーリを利用して来伊した。

表 3　来伊時のベパーリ使用の有無　　（単位：人）

ベパーリの有無		あり	なし	不明	計
カテゴリー	A	1	2	1	4
		25.00%	50.00%	25.00%	100.00%
	B	0	7	3	10
		0.00%	70.00%	30.00%	100.00%
	C	4	6	5	15
		26.67%	40.00%	33.33%	100.00%
	D	7	3	15	25
		28.00%	12.00%	60.00%	100.00%
全体		12	18	24	54
		22.22%	33.33%	44.44%	100.00%

出所：インタビュー調査より筆者作成

「バングラデシュで結婚をして子供が生まれたので、生活をよくしたいと思い、2 年前にイタリアにやってきた。バングラデシュで学士号を取得していて、故郷近くの町で、薬の卸売をする会社勤めをしていた。母の土地を売って渡航費用を用意し、ベパーリには 150 万タカから 160 万タカ（当時のレートで約 140 万円から 150 万円）を支払った」（#22, 路上の物売り）。

このように調査対象者たちの最終学歴が大卒以上であることと、かなり高額な仲介料を支払うだけの資産を準備できた人たちだということに注目したい。イタリアへの移民には多額の費用がかかるが、Rahman and Kabir［2012b］の研究ではその費用の平均が 1 万 US ドルとなって

いる。グループDの移民は、このような大金を払ってイタリアにやってきたものの定職につけぬまま、路上で物売りをしていた。

グループDの中で強い紐帯を利用した者も3名いたが、来伊時に彼らが所持していた強い紐帯は、グループCの移民のように、イタリア到着後に職を紹介してもらうほど強いものではなかった。その典型例が、路上で他のバングラデシュ人が行う大道芸の見張りをしていたコンドカールである（#39）。彼は先に来伊していた父親に呼寄せられて来伊した。

「イタリアにやってきたのは2年前。父親が先に来ていたので、家族呼び寄せのビザでやってきた。父親はヴェネツィアの造船会社で下請けの作業員をしていたが、自分が来た後でバングラデシュに帰国した。レストランなどでの仕事を探したが、どんなに履歴書を送っても、返事がなかった。今は探すことに疲れてしまっているので、考えたくない」（#39, 大道芸の見張り役）。

コンドカールの父親は、イタリア資本の会社で働いていた。このためグループCの人たちのように、親族が経営する店舗などで仕事を得るということができなかったのである。グループDの移民の場合、彼のように強い紐帯をもっていた回答者の場合も、来伊後に就労先を見つけられるほどの強さをもつ紐帯ではなかったため、弱い紐帯で来伊した人たちと同様に、自分たちで仕事を探している状態にあった。

以上のように、来伊時に弱い紐帯であるベパーリを用いた者が多いグループDに属する人たちは、イタリア到着後、強い紐帯を持たないが故に、安定した就労先を見つけるのに苦労している人が多い。ベパーリによる弱い紐帯は、イタリアで安定した仕事を得るためには役立たず、親族関係に基づく強い紐帯のように、イタリアでの安定した就業や生活に対して、目立った機能を保持していなかった。つまりグラノヴェッターが指摘した、より多くの新出情報が得られやすく社会移動の機会をもたらすという弱い紐帯の持つ機能が存分に生かされていない状態にあった。

5.　2種類の紐帯がイタリアでの生活・就業状況に与える影響

前節までに強い紐帯が就労及びイタリアでの生活に安定をもたらす役割を果たしていること、またグラノヴェッターの言う弱い紐帯の機能が働いていないことを見た。

しかし、本節ではこの強い紐帯が来伊後の生活・就労において、より大きな成功を得るためには役立たないことを明らかにする。具体的には、イタリアで成功しているグループAやBの移民が、来伊時にはグループDの移民と同じような状況にあったことを指摘し、強い紐帯よりも弱い紐帯の方が来伊後の生活において成功の鍵となりうる可能性が大きいことを指摘する。

来伊時に強い紐帯がある場合、イタリア到着後に就業先や居住先を見つけることは容易であるが、弱い紐帯については一概にそうとは言えない。例えば、渡伊前にイタリアでの職の斡旋も行うと言っていたベパーリが実際には来伊後に役立たない場合や、移民自身が渡航時に自分で航空券の手配を行うなどの海外移民に有利な知識を持っていなかったからベパーリを使った場合等が考えられるからである。

しかし、イタリアですでに安定した生活を手にしているグループAとBの移民のインタビューから、来伊後に安定した仕事をなかなか見つけることができず、グループDの人たちのように路上の物売りをしていたとの回答が複数得られた。2000年に来伊し、現在では複数の店舗を経営するグループAのアブドゥル（#14）はその典型例である。

「初めてローマに着いた時、同郷の人がローマにいることは知っていたが、事前に連絡先を知っている人はいなかった。来伊後に、あるバングラデシュ人と知り合い仕事を始めた。寒い時期だったので、手袋や耳当てといった防寒具を路上、学校の前などで売った。そのような仕事を複数しているうちに、自分の兄の知り合いとローマで偶然知り合い、彼がディスコ[15]での仕事を紹介した。」（#14, レストラン等を経営）。

彼はこのディスコでの仕事を長年続けていくうちに、後に彼のビジネスを手伝ってくれるようになるイタリア人と知り合った。この人物の協力を得てレストランを開業し、それ以外にも複数の事業を軌道に乗せ、成功を収めている。また、クマール（#25）のように路上の物売りをすることすら決断できずにいたと当時を振り返る移民もいた。

「イタリアに来る前に、すでにサウジアラビアや日本でも生活していたし、知り合いも多くいたので、来たら何とかなるとおもっていた。でも、最初は何もうまくいかず、帰ろうかと思った。自分には路上の物売りすらできなかった。そんな中、あるバングラデシュ人が出前を始めたらいいのではないかと言ってくれたのがきっかけで、この仕事を始めた」（#25, レストラン経営）。

クマールは、その後、バングラデシュ人向けのレストランを開業し、食事の出前も行っている。さらに店では、技術を身につけられるようにと仕事を見つけられずにいるバングラデシュ人移民を雇っている。

グループAやBの移民の来伊後の体験は、強い紐帯によってバングラデシュ人移民社会の中で安住しているグループCの移民とよりも、むしろ、安定した職を得ることができず何とか滞伊生活を送っているグループDの移民と類似している。つまり、グループDの移民の方がグループCの移民よりも、成功の前段階にあり、イタリア人のもとで働くなど、なんらかの上昇のきっかけを待っている人たちであると考えられる。

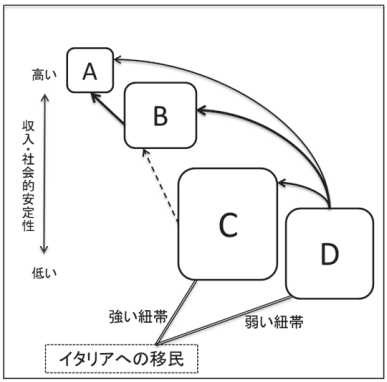
実際に、強い紐帯を保持するグループCの調査対象者の多くは、前節までに見たように「イタリアでの生活は良いし、バングラデシュでの生活よりも心地よい」（#2, 工場労働者）と現状に満足しており、上昇のチャンスに出会う機会も少なく、そのような志向を持っていないことがインタビュー調査から明らかになった。

つまり、強い紐帯はイタリアでの安定した就労や、安い住居を得るためには有効であるが、それゆえに来伊時の関係やバングラデシュ本国での社会階層を温存させてしまう。したがって来伊時にこの紐帯を保持し

ていた者の多くが他のバングラデシュ人のもとで被雇用者となり、バングラデシュ人移民コミュニティ内部で彼らなりの安定した生活を送っていた。このような安定した生活を手にしている彼らが、グループAやBの調査対象者が得ているような成功を求めることは難しい。

一方、この強い紐帯を持たずに来伊したバングラデシュ人移民の場合、同様の安定を得ることは難しく、路上で物売りをするなど日銭を稼がなくてはならない。それは同時にバングラデシュ人移民コミュニティ内部にとどまることなく、滞伊生活を送っていることを意味する。このような移民の中から、わずかではあるがイタリアでチャンスをつかみ成功を収めていく者がいると考えられる。

図4　4つのグループにおける移動の概念図



出所：筆者作成

この流れを図式化したのが図4である。バングラデシュからイタリアへの移民の来伊経路に注目すると、主として2つの経路がある。すなわち、強い紐帯である親族ネットワークを利用するか、弱い紐帯であるベパーリによる繋がりを利用するかで、これらの紐帯はグループCかグループDになるかということ、つまり来伊後の最初の就業に影響を及ぼす。強い紐帯を利用した場合、在伊バングラデシュ人社会内部で安定した生活を得られるが、その低所得状態にとどまる可能性も高い。一方、弱い紐帯を利用した場合はそうした安定を得ることは難しいが、何らかのきっかけで、強い紐帯を利用した人よりも大きな成功を得られる可能性は高くなる。

もちろん、そのような成功を収める者は少数であり、今回の調査では成功を得ることなく帰国した人は見えていないため、ここでは成功例しか考察できていない。しかし、グラノヴェッターの『弱い紐帯の強さ』

の理論的枠組みを用いることで、移民後の生活や就労に便益をもたらす親族関係に基づく強い紐帯が、滞伊生活において大きな成功をもたらさないことを明らかにした。

付表　調査対象者の属性

番号#	性別	居住地	教育年数	滞伊年数	ペパーリの利用	先に来伊していた親族の有無	就労状況	雇用形態	その内容	グループ
1	男	ミラノ	17	5	なし	あり	就労中	被雇用者	送金所	B
2	男	ミラノ	15	8	なし	なし	就労中	被雇用者	工場労働	C
3	男	ローマ	9	2	あり	なし	失業中	－	学生（中学3年）だが求職中	D
4	男	ローマ	15	16	なし	あり	就労中	自営	衣料品店	B
5	女	ミラノ	不明	15	なし	あり	就労中	被雇用者	高齢者介護施設	B
6	男	ミラノ	不明	24	なし	なし	就労中	被雇用者	配管関係技術者	B
7	男	ヴェネツィア	不明	8	あり	あり	就労中	被雇用者	バール	C
8	男	ヴェネツィア	不明	15	不明	不明	就労中	自営, 被雇用者	ホテル従業員、メストレで商店経営	B
9	男	フィレンツェ	不明	6	不明	不明	就労中	被雇用者	レストランの皿洗い	D
10	男	フィレンツェ	9	2	不明	不明	就労中	半自営	路上の物売り	D
11	男	ピサ	不明	2	不明	不明	就労中	被雇用者	土産物屋の屋台	D
12	男	フィレンツェ	15	3	不明	不明	就労中	被雇用者	バールで短時間労働	D
13	男	ペルージャ	不明	14	不明	あり	就労中	被雇用者	姉の店で働いている	C
14	男	ローマ	不明	14	なし	なし	就労中	自営	レストラン（＋肉屋、床屋）	A
15	男	ローマ	14	17	なし	なし	就労中	自営	食品輸入、卸売	A
16	男	ローマ	11	18	あり	なし	就労中	自営	食品卸、小売店経営	A
17	男	ローマ	13	12	なし	なし	就労中	被雇用者	土産物屋の屋台	D
18	男	ローマ	5	11	不明	なし	就労中	被雇用者	土産物屋の屋台	D
19	男	ローマ	10	不明	あり	不明	就労中	被雇用者	土産物屋の屋台	D
20	男	ローマ	3	25	不明	不明	就労中	半自営	飲料・菓子類の屋台	B
21	男	ローマ	15	8	あり	なし	失業中	半自営	新聞売り	D
22	男	ローマ	15	2	あり	なし	就労中	半自営	おもちゃ売り	D
23	男	ローマ	17	5	あり	あり	就労中	半自営	バラ売り	D
24	男	ローマ	不明	22	不明	不明	就労中	被雇用者	焼き栗売り	C
25	男	ローマ	14	8	なし	なし	就労中	自営	レストラン、ケータリング	B
26	男	ローマ	12	2	不明	あり	就労中	被雇用者	レストラン、ケータリング	C
27	男	ローマ	不明	10	不明	不明	就労中	被雇用者	魚の輸入	C
28	男	ローマ	8	6	なし	あり	就労中	被雇用者	ホテル、食料品店	C
29	男	ローマ	15	13	あり	なし	就労中	被雇用者	魚屋	C
30	男	ローマ	15	16	不明	なし	就労中	自営	魚屋	B
31	男	ローマ	9	10	あり	なし	就労中	被雇用者	食堂	C
32	男	ローマ	17	5	不明	不明	就労中	半自営	バスツアーのチケット売り	D
33	男	ローマ	不明	2	あり	不明	就労中	半自営	水売り	D
34	男	ローマ	17	4	あり	なし	就労中	半自営	おもちゃ売り	D
35	男	ローマ	不明	4	不明	不明	就労中	半自営	鞄売り	D
36	男	ローマ	不明	不明	不明	不明	就労中	半自営	カメラにつける部品売り	D

番号#	性別	居住地	教育年数	滞伊年数	ペパーリの利用	先に来伊していた親族の有無	就労状況	雇用形態	その内容	グループ
37	男	ローマ	不明	不明	不明	不明	就労中	被雇用者	バスツアーのチケット売り	D
38	男	ローマ	不明	5	不明	不明	就労中	半自営	おもちゃ売り	D
39	男	ローマ	11	2	なし	あり	就労中	半自営	大道芸の見張り	D
40	男	ローマ	16	7	あり	あり	就労中	被雇用者	食料品店（卸売）	C
41	女	ローマ	14	16	なし	あり	就労中	自営	食料品店	B
42	男	ローマ	12	5	不明	不明	就労中	被雇用者	自動車修理工＋ピザ屋	C
43	男	ローマ／フォリーニョ	16	5	なし	なし	就労中	被雇用者	食料品店	C
44	男	ローマ	15	20	なし	なし	就労中	被雇用者	送金所	B
45	男	ローマ	15	19	不明	なし	就労中	自営	農場経営、食品卸業など	A
46	男	ローマ	12	16	なし	あり	就労中	被雇用者	アクセサリーショップ	C
47	男	ローマ	不明	7	なし	あり	就労中	被雇用者	ビデオ、本販売店	C
48	男	ローマ	不明	10	なし	あり	就労中	被雇用者	ビデオ、本販売店	C
49	男	ヴェネツィア	不明	7	なし	あり	就労中	半自営	バラ売り、おもちゃ売り	D
50	男	フィレンツェ	9	1	不明	不明	就労中	半自営	路上の物売り	D
51	男	ローマ	不明	5	不明	不明	就労中	半自営	バラ売り	D
52	男	ローマ	不明	8	不明	不明	就労中	半自営	バラ売り	D
53	男	ローマ	不明	4	不明	不明	就労中	半自営	バラ売り	D
54	男	ローマ	不明	1	不明	不明	就労中	半自営	バラ売り	D

出所：インタビュー調査に基づき筆者が作成

注記

[1] ここでは自発的に雇用や労働の機会を求めてイタリアに移り住む人、及びその家族のことを移民とする。

[2] イギリスでは 1962 年にコモンウェルス移民法（Commonwealth Immigrants Act 1962）が制定されると［宮内 2011：181］、家族呼び寄せを除くイギリスへの新規入国が規制されるようになった［長谷 1993：203］。

[3] Priori［2012］によれば、70 年代後半にバングラデシュ人が最も望んだヨーロッパ大陸での移民先は西ドイツであったが、その理由は建国の父であり初代大統領のムジブル・ラーマンが青年陸軍将校によって殺された 1975 年のクーデターがあったために、比較的容易に政治的難民という法的地位を得ることができたためであった［ibid., p.57］。この状況は西独政府が難民受け入れを制限する 1979 年まで続き、その後は当時、移民に対して比較的寛容な政策を取っていたフランスが新しい目的地となった［ibid., p.57］。しかし、1990 年頃からフランスで移民の受入れが制限されるようになると、バングラデシュ人移民は南欧諸国と旧ソ連圏諸国へと流入するようになった［ibid., p.57］。東欧では 1990 年代に入って民主化がなされ移民の流入が進んだが、当時、旧ソ

連圏諸国と良好な関係にあったバングラデシュからは、多くの若者が奨学金によりソ連やワルシャワ条約締結国に留学をしていた。こうした若者もまた、その地に残り商売を営むなどビジネスチャンスを探っていったが、1989年頃になると東欧諸国の経済が停滞、彼らの間でも南欧諸国が新たな移民先として台頭した［ibid., p.57］。

[4] イタリア政府統計局（ISTAT）による。

[5] イタリアの地方行政区画は州（*regione*）、県（*provincia*）、コムーネ（*comune*）の3層制である。移民は北部に多いため、州や県の単位ではローマのあるラツィオ州やローマ県よりも、ミラノを含むロンバルディア州やミラノ県の外国人滞在者数のほうが多い。

[6] イタリア政府統計局（ISTAT）による。

[7] インタビューは半構造化インタビューの形式で、イタリア語、英語、ベンガル語の3言語を使用した。

[8] 2014年の国連欧州経済委員会（UNECE）の統計によれば、税控除等なしのイタリアの平均月収（Gross Average Monthly Wages）は2394.2ユーロである［http://w3.unece.org/PXWeb2015/pxweb/en/STAT/STAT__20-ME__3-MELF/60_en_MECCWagesY_r.px/?rxid=b8967479-5b0a-4e19-b783-bc2e1562ee73, accessed 2016/06/30］。

[9] Cに分類されるバングラデシュ人移民の多くは、郊外に居住し工場等で就労しているため、今回の調査ではインタビューを行うことができなかった。したがって、本調査でCに分類された者の多くは、工場労働者ではなく市街地にあるバングラデシュ人経営の店で働いている者となっている。

[10] 国連教育科学文化機関（UNESCO）の統計では第3段階教育（tertiary education）修了者と表記されている［http://www.uis.unesco.org/DataCentre/Pages/country-profile.aspx?code=BGD&regioncode=40535, accessed 2016/06/30］。

[11] 自分より先に来伊していた親族がいたと回答したグループBの移民のなかに、女性2名が含まれることには留意すべきである。バングラデシュ人移民の場合、単身男性が先に移住し、その後、妻を呼寄せるのが一般的である。このため、女性の調査対象者より先に夫がイタリアに渡っているのは当然である。したがって実際には、グループBにおいてもグループAと同様に、自分より先に来伊した親族がいたと回答した人は、親族がいなかったと答えた人よりも少ないことになる。

[12] 以下、本文中のインフォーマントの名前は全て仮名である。

[13] 英語と同様に、ベンガル語でメス（*mess*）は食事を一緒にとる仲間を指すが、メスと呼ばれる複数人が生活を共にする住居自体をも指す［Bangla Academy

1994, reprinted 2014]。

[14] 注 8 参照。

[15] ディスコはイタリア語の *discoteca* の和訳であり、アルコールを提供し、音楽を流し、客が踊る店である。現在の日本語ではクラブが最も近いが、ここではイタリア語に近い響きを持つディスコを用いた。

参考文献

イタリア国立統計研究所（ISTAT）http://www.istat.it

グラノヴェッター，マーク・S.，2006,「弱い紐帯の強さ」，野沢慎司（編・監訳），『リーディングスネットワーク論：家族・コミュニティ・社会関係資本』，勁草書房.

長谷安朗，1993,「イギリスのバングラデシュ系移民」，長谷安朗･三宅博之（編），『バングラデシュの海外出稼ぎ労働者』，明石書店.

宮内紀子，2011,「1984 年イギリス国籍法における国籍概念の考察：入国の自由の視点から」，『法と政治』，62 巻 2 号，pp.163-203，関西学院大学．http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/8037 (accessed 2016/06/26).

Bangla Academy. 1994, Reprinted in 2014. *Bangla Academy Bengali-English Dictionary*, Dhaka: Bangla Academy.

Bisio, N. 2014. “Le donne bangladesi a Roma: come si trasforma una comunità”. *Storia delle Donne*, Vol.9, pp.49-69. http://www.fupress.net/index.php/sdd/article/view/14068(accessed 2016/06/26).

Della Puppa, F. 2012. “Uomini in cammino. Percorsi di istituzione della vita adulta e trasformazioni della maschilità nella diaspora bangalese”. Università degli Studi di Padova, Ph. D thesis.

Knights, M. 1996. “Bangladeshi Immigrants in Italy: From Geopolitics to Micropolitics”. *Transactions of the Institute of British Geographers. New Series*, Vol. 21, No. 1, pp. 105-123, http://www.jstor.org/stable/622928 (accessed 2016/06/26).

LPS., Ministero del Lavoro e delle Politiche Sociali. 2014a. *The Bangladeshi Community in Italy, Annual report on the presence of immigrants-2013*. http://www.integrazionemigranti.gov.it/Attualita/Approfondimenti/Documents/rapporti%20tradotti%2022%20luglio%202014/2013-ComunitaBengalese_en_def.pdf (accessed 2016/06/26)

LPS., Ministero del Lavoro e delle Politiche Sociali. 2014b. La comunità Bengalese in Italia-Rapporto annuale sulla presenza degli immigrati 2014, http://www.integrazionemigranti.gov.it/Attualita/Approfondimenti/Documents/rapporti_comunita_2014/rapporti%20integrali/ComunitaBengalese.pdf(accessed 2016-06-26).

Massey, Douglas S. and Arango, J. [et al.]. 1998. *Worlds in motion: understanding international migration at the end of the millennium*, Oxford: Clarendon Press.

Mannan, K. Abdul., and Farhana, K Mursheda. 2014. *Migration Laws, Policies and Economics in Europe: An Empirical Study of Legal Status, Remittances and Scio-economic Impacts in Rural Bangladeshi Households*. Saarbrücken: LAP LAMBERT Academic Publishing.

Pompeo, F. (a cura di). 2011. *Pigneto-Banglatown : migrazioni e conflitti di cittadinanza in una periferia storica romana*. Roma: Meti.

Priori, A. 2012. *Romer probashira : reti sociali e itinerari transnazionali bangladesi a Roma*. Roma: Meti.

Quattrocchi, P. e Toffoletti, M. et al. 2003. *Il fenomeno migratorio nel comune di Monfalcone : il caso della comunità bengalese*. Gradisca d'Isonzo: La Grafica.

Rahman, Md Mizanur. and Kabir, M. Alamgir. 2012a. "Moving to Europe: Bangladeshi Migration to Italy". *ISAS Working Papers*. Issue 142, Singapore: Institute of South Asian Studies (ISAS), The National University of Singapore. http://mercury.ethz.ch/serviceengine/Files/ISN/137192/ipublicationdocument_singledocument/2c767992-c7ed-40cc-8487-c4c3d63c0dae/en/ISAS_Working_Paper_142_-_email_-_Moving_to_Europe_-_Bangladesh_Migration_to_Italy_07022012143721.pdf (accessed 2016/06/26).

Rahman, Md Mizanur. and Kabir, M. Alamgir. 2012b. "Bangladeshi migration to Italy: the family perspective". *Asia Europe Journal*, Volume 10, Issue 4, pp 251-26.

Savini, G. (a cura di). 2004. "Bangladesh", *Libro dei popoli, Osservatorio regionale immigrazione della Regione del Veneto*, pp.77- 86. http://www.venetoimmigrazione.it/Portals/0/pdf/pubblicazioni/libro_dei_popoli.pdf (accessed 2013/11/25)